

史料紹介

ジェイン・バーカー「乙女の生活」ほか(翻訳と解題)

大久保友博

はじめに

本稿は、17世紀末から18世紀初めにかけて英国・フランスで活動した文筆家のジェイン・バーカー (Jane Barker, 1652-1732) が執筆した詩「乙女の生活」(“A Virgin Life”)と「詩神との約定」(“The Contract with the Muses”)を中心に、近代英国における女性の文芸文化を伝える重要な文献として本邦初訳を試み、英文学および翻訳史上の理解に必要な情報も併せて簡便に提供するものである。

〔日本語訳〕

乙女の生活(文芸部版、1687年公表)

おお権能なる神よ、汝がわれに、純潔にふさわしい
いとも多大な本性をくださっているのだから、
男どもの全能にも近い色事の支配下に
どうか私が堕ちないようにしたまえ。
ただこの幸せな生活をそのまま続けさせたまえ、
二十五の齢やそのあらゆる余波へのおそれもなく。
軽視や嘲笑の的になったり、「行き遅れの乙女」と呼ばれたりする
たくさんの方に背いてきたこうした小鬼たちはやがて、
男どもに追われた罪のないヤギたちのように、
避難所を求めてライオンの穴へと走り込む。
ああ、愛しき暮らしぶりよ！ 汝のために何と狂わしい企てを
起こす者さえいるのを見るのは、いかに奇妙なことか！
汝の存在は、惨めさそのものであるかのようで、
またはどこまでも醜い衣に包まれた不潔な化け物かのようで、
それでいて、汝の美しさは純粹で神々しく、

その想いは神聖なるもので、その言葉は天使のよう。
そしてそうした人々は、みな汝の修道女であるべきで、
もしくはただそうせざるをえないからそうあるのだ。
乙女は、あらゆる善の刻印を持ち、
その恐ろしい名のもとに、あらゆる徳目が理解される。
その顔つき、その物腰、その装いのどれもがしとやかで、
慎み深さ以外に何も過度には現れてこない。
そして彼女が何かもてなしや訪問をするとき、
それはおしゃべりのためではなく、友情のため。
近隣の貧しい人々を自身の相続人に選んで、
彼らを優先して自分自身にはあまり気に懸けない。
そして従順によって、どこまでもたくましい男と
同じくらい良い臣下となりうると証明される。
彼女は自らの教会に、原始の時代に生きていると
思われるほどの、子としての務めを果たす。
乙女が多くの時間を費やすそのさやかな私室は、
彼女の書斎でもあり礼拝堂でもあり、
そこで彼女はひとり社交を愉しむ、
大いなる三位一体のうちに。
その女はその一生涯の務めを次の目的のために行うのだ、
その神に仕えんため、自身の書物や友人らと楽しく過ごすために。

乙女の生活(亡命版、1701年頃執筆、下線部は異同)

慈悲深き天よ、汝がわれに、純潔にふさわしい
いとも多大な本性をくださっているのだから、
男どもの全能にも近い色事の支配下に
どうか私が墮ちないようにしたまえ。
ただこの幸せな境遇をそのまま続けさせたまえ、
そして清らかな詩で、さらに清らかな私の想いを語らせたまえ。
時と美が終わりなき戦いに入るときにも
二十五の齡やそのあらゆる嵐へのおそれもなく、
そして頻りに幸せな乙女を寄る辺ない婦人にするという
年増の評判へのおそれがなくても、
その評判につきものの嘲笑にわれらが女性は背きながら、
やがて頻りに自分自身を捨てたりする。

男どもに追われた罪のないヤギたちのように、
 避難所を求めてライオンの穴へと走り込む。
 ああ、愛しき暮らしぶりよ、汝のために何と狂わしい企てを
起こす者さえいるのを見るのは、いかに奇妙なことか。
 汝の存在は、惨めさそのものであるかのようで、
 またはどこまでも醜い衣に包まれた不潔な化け物かのようで、
 それでいて、汝の美しさは純粹で神々しく、
 その想いは神聖なるもので、その言葉は天使のよう。
 そしてそうした人々は、みな汝の修道女であるべきで、
 もしくはただそうせざるをえないからそうあるのだ。
 乙女は、あらゆる善の刻印を持ち、
 その名のもとで、あらゆる徳目が理解される。
 その顔つき、その物腰、その装いのどれもをしとやかにしようと、
 慎み深さ以外のものは何も過度には現れてこない。
乙女が何かもてなしや訪問をするとき、
 それはおしゃべりのためではなく、友情のため、
 近隣の貧しい人々は自ら選んだ相続人であり、
 彼らを優先して自分自身にはあまり気に懸けない。
 そして従順によって、どこまでもたくましい男と
 同じくらい良い臣下となりうると証明される。
 彼女は自らの教会に、原始の時代に生きていると
 思われるほどの、子としての務めを果たす。[以下4行削除]
その一生涯の務めをその女は次の目的のために行うのだ、
その神に、その隣人に、その友人らに仕えんために。

乙女の生活(物語版、1723年公表、下線部は前出との異同)

おお善き天よ! 汝がわれに、純潔にふさわしい
 いとも多大な本性をくださっているのだから、
 男どもの全能にも近い色事の支配下に
 どうか私が墮ちないようにしたまえ。
 ただそのままこの幸せな境遇を続けさせたまえ、
 そして清らかな詩で、さらに清らかな私の想いを語らせたまえ、
 時と美がどこまでも続く戦いに入るときにも
 二十五の齡やそのあらゆる嵐へのおそれもなく。
いったんその時計が打ち鳴らされてしまうと、あらゆる心が引くのだ、

夜明けを避けるこびとたちのように、または火を避ける獣たちのように、
これは美の巾着なのだ。もはや殺され尽くしても、
死にかけの恋人たちはみなまたしても甦る。
そののち毎日、われらは新たな侮蔑をあれこれ目にする、
男たちの嘲笑的や無用の長物とでもいうように。
こうした恐ろしい見立てにも、頻りにわれらが女性は背きながら、
避けようとしても幾人かは自分自身を捨てたりする。
男どもに追われたときの罪のないヤギたちのように、
避難所を求めてライオンの穴へと走り込む。
__ああ、幸せな暮らしぶりよ！ 汝のために何と狂わしい企てを
起こす者さえいるのを見るのは、いかに奇妙なことか！
汝の存在は、惨めさそのものであるかのようで、
またはどこまでも穢わしい衣に包まれた不潔な化け物かのようで、
それでいて、汝の美しさは純粹で神々しく、
その想いは神聖なるもので、その言葉は天使のよう。
そしてそうした人々は、みな汝の修道女であるべきで、
もしくはただそうせざるをえないからそうあるのだ。
乙女は、あらゆる善の刻印を持ち、
その名のもとで、あらゆる徳目が理解される。
その顔つき、その物腰、その装いのどれもがしとやかで、
慎み深さ以外のものは何も過度ではない。[以下 8 行削除]
その生涯の務めはこのために差し出される、
その神に、その隣人に、その友人らに仕えんために。

詩神との約定、陰なすトネリコの樹皮に書き刻む (1701年頃執筆)

どうやらその陰が、妙な想いを起こさせる、
私の頭を熱し、私の胸を冷やし、
そして私に月桂冠を思い出させるあのことを。

どうやら私には、詩神たちが歌うのが聞こえる、
みんなして輪になって踊るのが見える、
そして翼を持てと私に声をかけるのが。

いわく、我らは汝の飛翔を手助けしよう、
素晴らしきオリンダの高みに汝が届くまで、

もし汝がこの世の愚を軽視できるならば。

我らはこれを我らの輝かしき住まいへと運ぼう、
英傑神格たちのあいだへと、
もし汝と幸いに対立しうるなら、

ならば高潔な娘よ、汝の鎖を解くがよい、
汝の不実な恋人に汝をくくりつけるものを、
そして乙女の純潔を保つと誓いなさい。

書け、書け、汝の誓いをこの木に、
我らによってそれが記録されれば、
さすれば汝はとこしえに名を得よう。

私がこの無邪気な詩行を読んだとき、
自分の野暮な保護者が言ったことを思い出した、

— 不運な乙女だ、

汝は詩神たちを選んだのだから、なのだから、
結婚の神と幸運は汝の敵、
汝が不運だというあらゆるもののなかに、
汝はカッサンドラの定めを抱いてしまった、
知恵の神が彼女にこの呪いを与えた、
そして汝には運命の女神がそれ以上にひどいものを与える、
汝のなすあらゆることに、良いものがけしてなかろうと、
とにかく全世界によって誤解されようぞ。
行いのうち最良のものでも、見下されよう、
そして愚者とならず者が、汝以上に賞賛されよう。
蛇のような敵たちが音を立てて嘲り、汝に噛みつく、
汝の友らもまた呼応して汝を軽視する。
愛の神よ、恋人たちよ、汝に痛みを与えよ。
なぜなら彼らと汝が愛しても無駄なのだから、
死が汝から彼らを奪うか、
その逆か、汝が彼らを捨てるかになり、
汝の若さと幸運はいたずらに費やされ、
そしてその齢でもひとりの友もなく、

汝の全生涯は不満のままに過ぎ去る、
欠乏と悲哀、そして追放のうちに。
運命の輪のもとで砕け散れ、
諺にあるように、地獄で猿の先に行け。
この叱責には私の悲痛も並外れてひどかったからこそ、
そこで目覚めた私は、夢であるとわかってほっとしたのだ。

[物語版(1713年)では、前半の決意部分と後半の回想部分は別の箇所に入挿され、後者初めの1行半が省略された上で、「諺にあるように、地獄で猿の先に行け。」の詩行が以下に置き換わる。

汝の行いがけして上手くいかぬように定めよ。
とっておきの千もの病を
幸運の女神は授けよう、
詩神たちと組みした者どもに。]

[訳者解題]

1 底本テキストについて

本翻訳で使用した底本を記す。

「乙女の生活」(文芸部版)は、現代の校訂版として以下のものを用いた。

P. Hammond [ed.] (2002). *Restoration Literature: An Anthology*. Oxford: Oxford University Press, pp.233-234.

合わせて、初出 *Poetical Recreations* (1688) のファクシミリ復刻である次の刊本と、続く電子翻刻も参照した。

R. C. Evans [ed.] (2009). *Jane Barker – The Early Modern Englishwoman: A Facsimile Library of Essential Works. Series II Printed Writings, 1641-1700, Part 4; v. 1*. Farnham: Ashgate.

EEBO Text Creation Partnership [ed.] (2003). *Poetical Recreations Consisting of Original Poems, Songs, Odes, &c. with Several New Translations: in Two Parts / Part I, Occasionally Written by Mrs. Jane Barker, Part II, by Several Gentlemen of the Universities, and Others*. Ann Arbor, MI: Early English Books.

<<http://name.umdl.umich.edu/A30923.0001.001>>

「乙女の生活」(亡命版)は、現代の校訂版として以下のものを用いた。

G. Greer, J. Medoff, et al. [eds.] (1988). *Kissing the Rod: An Anthology of Seventeenth-*

Century Women's Verse. London: Virago Press, pp.360-363.

「乙女の生活」(物語版)は、物語 *A Patch-Work Screen for the Ladies* (1723)に挿入されたもので、現代の校訂版として以下のものを用いた。

C. S. Wilson [ed.] (1997). *The Galesia Trilogy and Selected Manuscript Poems of Jane Barker: Women Writers in English 1350-1850*. Oxford: Oxford University Press, pp. 139-140.

合わせて、前掲 *Kissing the Rod* に示された異同と、刊本のファクシミリ復刻として以下も参照した。

M. F. Shugrue and J. Grieder [eds.] (1973). *The Prude by Mrs. A.; A Patch-Work Screen for the Ladies by Jane Barker: Foundations of Novel*. New York: Garland Publishing.

「詩神との約定」は、現代の校訂版として以下のものを用いた。

C. S. Wilson [ed.] (1997). *The Galesia Trilogy and Selected Manuscript Poems of Jane Barker: Women Writers in English 1350-1850*. Oxford: Oxford University Press, pp. 324-325.

ただし上に示したのは手稿版であり、書籍としての初出は物語 *Love Intrigues* (1713)で、主人公の詠む詩として挿入された。上記校訂版では p.14 および pp.25-26 に当たる。そのためこちらも次のファクシミリ復刻を参照している。

M. F. Shugrue and J. Grieder [eds.] (1973). *The Lover's Week and The Female Deserters by Mary Herne; Love Intrigues by Jane Barker: Foundations of Novel*. New York: Garland Publishing.

2 原著者について

これらの詩の作者ジェイン・バーカーについては、初期近代(近世)で公職に就かなかった非国教徒の例に漏れず、詳細なことはわかっていない。ただし20世紀末のフェミニズム批評の流れから注目されて以後、キャスリン・キング(Kathryn King)やキャロル・ウィルソン(Carol Wilson)らが伝記的事実を精力的に調査した結果、多少なりは判明してきている。

ジェイン・バーカーは1652年、チャールズ1世の廷臣であったとされる金融業代理人の父トマス(Thomas)と、敬虔なカトリック教徒であった母アン(Anne)のあいだに、ノーサンプトンシア北部のブラザーウィック村(Blatherwycke)で生まれたという。両親はどちらも熱心な王党派で、王政復古後のいずれかの時期に一家はカトリックに改宗したと考えられ、バーカー自身もカトリック信仰を奉じている。

バーカーの育った土地は生地から30キロほど北の、のちに一家が移り住んだリンカーンシア南部のウィルスソープ村(Wilsthorpe)である。夭折した2歳年上の兄エドワード(Edward)はオ

ックスフォード大学に通っていたようで、彼から医術(薬学・解剖学)とラテン語の手ほどきを受け、その兄の人脈から(または隣人で縁者のジョン・ニュートン(John Newton, c.1660s-1714)か母方の親戚ジョン・コノック(John Connock, c.1654-1730)のついで)ケンブリッジの大学人たちからなる文芸サークルとの交流があったと思われる。75年に兄を、81年に父を亡くしているが、その前後に自宅の借用に問題が起こったからか、まずケンブリッジシアのシンゲイ(Shingay)という土地に一家で引っ越ししており、そのあと未亡人になった母とともに(先に都会へ出ていた弟ヘンリー(Henry)か母方の親類を頼って)ロンドンに移り住んでいる。

チャールズ2世時代(60-85年)の社交界・文学界隈がそれまでとは打って変わって明るく奔放だったことはよく指摘されるが、この初期に時代の寵児としてもはやされたのが〈比類なきオリнда〉ことキャサリン・フィリップス(Katherine Philips, the Matchless Orinda 1632-1664)なる女性だった。自ら文芸サークルを主宰して活動する彼女の存在はそれまでに一部で知られていたが、脚光を浴びたのは63年にダブリンで上演された自身訳出になる演劇の大成功がきっかけだった。同年に刊行された台本も好評で、熱心なファンからの手紙も大量に受け取ったという。

文芸世界におけるジェイン・バーカーの模範が、その幼少期に活躍していたオリндаであることは、「詩神との約定」で言及されていることから間違いないだろう。当時、貴人たちの文芸は手すさびであり、内輪のサークルで手書きの原稿が回覧されるのが書籍の流通よりも一般的であった。さらに17世紀を通して、大学周辺には詩の書写・回覧に必要な整理帳(commonplace books)というノートを所持している者が多かったことから、大学が手稿回覧の場として機能してもいた(Love, 217-224)。バーカーが(手紙や手稿のやりとりや実際の交流を介して)参加していた文芸サークルも、そうした文化の一側面だろう。1687年12月に刊行された『詩の愉しみ』(*Poetical Recreations*)は、バーカーも加っていたその文芸サークルの雰囲気やうかがい知れるばかりか、彼女こそが中心人物であったことを思わせる。2巻に分けられたこの書籍は、2巻目はケンブリッジ大学周辺の才人たちによる雑詠集だが、その第1巻はジェイン・バーカーの詩集(約100頁)として独立している上に、その巻頭にはやはりバーカーとオリндаを比較して褒め称える詩が置かれ、その作者ジョン・ニュートンはオリндаたちが文芸サークル内では牧歌風の二つ名を用いて交流していたことに倣って〈フィラスター〉と署名もしている(なおバーカー自身の二つ名は〈ガレシア〉または〈フィデリア〉)。

のちにバーカーはこの詩集のことを「同意なく印刷された」(King 1998, 43)と記しているが、彼女は「手稿と印刷の慣習を抜け目なく活用」(Eicke, "Jacobite Writing", 137)したとも指摘されているように、この記述も文字通りには受け取れない。17世紀にはまだ「印刷の恥辱」(Saunders, "The Stigma of Print")という感覚が残っていて、ふつう文芸は親しい間柄で回覧するもので、それを印刷出版して世に晒すのは貴人にとって恥とされたからだ。世紀後半には意識も薄れてきているとはいえ、女性や保守的な人物であれば、建前上は〈固辞〉しておいて、〈熱心な絶賛者によって押し切られて〉、または〈作品そのものが優れているから勝手に〉出

版されたという体裁を取るのが慣習であり礼節である。そして著者に恥をかかせないために巻頭にその人物の文才を褒め称える詩が置かれ、この場合には6人もの人物(おそらく皆男性)が詩作を寄せている(ただし書籍扉に実名を出したことは女流詩人出版の時流に乗ろうとしたとはいえ配慮が足りなかったかもしれない)。

バーカーが書籍の刊行を少なくとも承知していたことは、第2巻に収録されたジョン・ニュートンの詩が、「ジェイン・バーカーに宛てて、現在印刷中の彼女の最も魅力的かつ優れた物語『スキピナ』について」と題されていることや、出版者自身が知人で、なおかつバーカー手製の菓の小売りをして彼女の生計の手助けをしていた人物であること、またのちに書いた詩「私の詩を褒めてくれた友人たちに」で好意的に振り返っていることから傍証される。この『スキピナ』(Scipina)自体はそののち政情が悪化したこともあって刊行はされないのだが、その原因こそが『詩の愉しみ』出版からすぐに始まったいわゆる〈名誉革命〉である。

チャールズ2世崩御後に王位を継いだジェームズ2世はカトリックの信奉者で、王権中枢をも(人口的には全体の1%にも満たない)カトリック信者で固めようと強権的な政権運営をしたため、国教会関係者や国民から不審の目を向けられていた。当時英国と対立していたフランスがプロテスタント排撃の方向に向かっていたことや、カトリック教徒は国家転覆を狙っているというデマがたびたび広まったこともあって、護国的なプロテスタントの王による統治が待望されたのである。このことから一般のカトリック教徒にも偏見の目が向けられ、オラニエ公ウィレム3世が到着直前の88年12月のロンドンでは、カトリック教徒が首都に火を付けるという虚報が流れ、ジェームズ2世が逃亡した次の夜には恐慌に陥った市民たちがカトリックの礼拝堂や教徒の家屋を焼いたという。

むしろバーカーの安全も脅かされることになり、詩による令名も確立できないまま、翌89年には彼女自身も(このとき母を亡くしていたので単身で)出国し、亡命宮廷のあったフランスのサン＝ジェルマン＝アン＝レー(Saint-Germain-en-Laye)に移り住み、あくまでジェームズ2世を正統な王とする〈ジャコバイト〉の仲間入りをするようになった。ただし、廷臣であった母方の親戚を頼ったとはいえ正式な宮廷の一員でなかったため禄はなく、かなり苦しい日々で白内障も患ったとされるが、それでも15年亡命生活を続けている。近隣のポントワーズ(Pontoise)にある英国ベネディクト会系の女子修道院に関わっていたという記録もある。

そのあいだも、サン＝ジェルマン周辺のジャコバイトたちとは交流し、詩を書き続けるとともに、『スキピナ』についても改稿を続けていたという。詩については、革命や亡命生活を嘆く折々の詩篇のほか、亡命君主をたたえる詩行やフランスでしたための社交詩を書いたばかりか、『詩の愉しみ』から数篇を抜き出して推敲もしたようである。皇太子に宛てて献呈された詩篇の手稿が現存するほか、それとは別に1701年頃バーカー自ら詩をまとめたものが現在でも〈マグダレン手稿〉(Magdalen Manuscript)として残されている。

やがてジェームズ2世が亡くなり、ウィリアム3世(ウィレム3世)も没すると、1704年にはバーカーも家督の相続人としていったん帰国してウィルスソーブに戻ったようで、姪(ヘンリー

の娘)とともに一農夫としてしばらく慎ましく過ごしながら、亡命中に書き始めたと思しき物語『愛のたくらみ』(*Love Intrigues*)を13年に刊行、そして『スキピナ』を大幅加筆・改稿した物語『イグジリウス』(*Exilius*)を翌14年に出版している。こうした作品群は、主人公や登場人物が名誉のための文筆へと挑む女性として描かれることから、「半自伝的」(Winson, *Galesia Trilogy*, xvi)とも言われている。しかし15年にジャコバイト蜂起があったあと、訴訟案件からカトリック教徒であることが知られてしまうと、要注意人物としてマークされ、フランスにいる知人たちへの暗号手紙が当局に接收されてしまうこともあったようだ。

17年ごろ姪の再婚先と金銭がらみの揉め事があっていったんロンドンに戻るも、そののちも筆は執り続け、18年には翻訳『キリスト者の巡礼』(Fénelon, *The Cristian Pilgrimage*)、23年には断章的物語『淑女のための寄布細工の衝立』(*A Patch-Work Screen for the Ladies*)、25年には続篇『寄布細工の衝立の裏地』(*The Lining of the Patch Work Screen*)を出版している。ただしこれらは(当該物語の主人公らとは異なり前述の経緯もあって)金銭的な動機からなされたという説もある(Eicke, “Jacobite Writing”, 151)。やがて質素に暮らしてもカトリック教徒には英国はやはり肩身が狭かったのか、27年には再びフランスのサン＝ジェルマンに戻り、32年にその地で80年の独身生活を終えている。

3 背景・内容について

2巻本『詩の愉しみ』自体は、ほとんどが〈折々の詩〉(occasional poems)なる社交詩で構成されている。これは大小問わず何か特別な出来事があったときに書かれる一種の抒情詩で、大きなものでは冠婚葬祭・記念日・戦勝・誕生・達成・公的儀式が扱われ、もっと個人的なことでは景色や随想のほか小さな祝い事、自分や他人の失恋などに寄せてしたためられる。それ以外に収められたものとしては手すさびの翻訳・翻案があり、またバーカーの趣味かつ小金稼ぎであった美術・本草についての詩もあるが、最も特異なのは、バーカーが自身の独身生活や処女性について内省した少数の詩篇だろう。

社交詩は基本として互いに見せ合うことが前提とされるため、他者への呼びかけになるが、ここで訳出した「乙女の生活」(“A Virgin Life”)は、むしろ神への祈願詩(invocation)に近い。ギリシア・ラテン文芸の伝統では、叙事詩の冒頭で詩神に呼びかけて詩想の源を下してくれることを乞い、詩の成功を祈るものだが、後年にはこうしてその部分だけ取り出して詩となることもある。ただしこの「乙女の生活」では、ラテン・ギリシアの要素は薄れ、むしろ乙女の処女性を守ってくれるように願う修道女の祈りにも似たものとなっている。

当時の英国では修道女はすでに架空の存在で、ヘンリー6世らの宗教改革に伴う16世紀中葉の修道院解体によって、かつて2000人近くいたという修道士は男女ともにほとんどいなくなっていた。英国で修道女が現実には復活するには、19世紀前半のカトリック解放法とオックスフォード運動を待たねばならず、17世紀には豊かなカトリックの家の娘が宗派的な生き残り策と

して海外の修道院に送られることはあっても、一般的には、ないものとして懂れる対象であった。

しかしその一方で(あるいはだからこそ)17世紀の文芸では、文化的記憶に残る修道女が象徴として何度も描かれる。安達まみは、現実には失われてもなお初期近代の英国文化で繰り返し描写される修道女の姿を考察しているが、物語のなかの修道女へあざ笑うような猥雑な視線が向けられながらも、「修道院への入会は、男性との関係性を築く可能性をもって流通していた女性人物が、その状況から身を引くというかたちで可視化される」(163)という一類型をも指摘している。

つまりここでは、結婚という世俗の圧力を振り払い、自分の内心と読書・執筆という生活を守るために、カトリック教徒であるバーカーが処女性と修道女というモチーフを信仰の盾として活用しているということになる。修道院文化の研究者にして自身も修道僧であるルクレール(Jean Leclercq, 1911-1993)によれば、そもそも修道士のなかでは瞑想・読書・祈りは一体であって、「祈り始めるために、礼拝堂へ行く必要はな」く、「むしろ、読むことそれ自体に、祈り、観想する手段が見出される」(99)ものなのだ。そのためここで、読書をする書斎と祈るための礼拝堂が一致することこそ要点で、国王への忠誠と救貧活動を引き合いに出して修道士の三誓願である清貧・従順・貞潔をも援用しつつ、さらに書物を所有格つきの複数形(her books)にすることで聖書から拡張して文芸の世界までを守ろうとしている。

『詩の愉しみ』全体に収められたバーカーやその取り巻きたる男性たちの社交詩を合わせて読むと、すでにキャロル・バラシュ(Carol Barash)やキャスリン・キングが論じているように、求愛詩が交わされるなかで、性役割と個々人の思惑がせめぎ合うサークルの内情が見えてくる(Barash, 175-191; King, "Sociable", 553-562)。バーカーをオリンダや神に喩えて支配者のように扱いつつ、一方では(おそらく無意識に)男たちの都合の良い性役割に引きずり落とそうとしているのだが、バーカー本人からすれば「結婚によって自由と幸せの喪失が起こる」(King, "Sociable", 561)のだからむしろ抵抗するものの、オリンダのように、あるいは中世恋愛詩の貴婦人のようにプラトニックな友愛を貫くにも、やはり限界はあっただろう。

詩の回覧や実際の交流のなかでなされるごつことも真剣ともつかない求愛競争に対して、カトリック教徒として取れる最大の盾があくまでも〈純潔〉を宣言することであった。そして修道女のメタファーを用いて読書や文筆と一体化させれば、自己の生活と信仰の正当化にもなる。むしろカトリックでは、処女であれば必ず死後の救済が約束されるほどの強い動機があるのだから、彼女の信仰を尊重する限り無碍にできないことは周囲の者にも当然理解できたであろう。

ただしその状況が(主に外部的要因から)長続きしなかったことは、伝記的事実からも明らかだ。名誉革命に伴う身の危険から出国したことで、文芸サークルでの交流関係そのものを、バーカーは失ってしまう。「乙女の生活」の亡命版から、〈私室〉と〈書物〉が消え去っているのは、当時の境遇を反映したものであるだろう。ひとり手稿回覧という社交のできた書斎がなくなるのは当然のこととして、書物とて亡命時にたくさん持ち運べたわけではなかろう。それでい

て宮廷が近くなれば世俗性も高くなるだろうし、そのなかで〈清らかさ〉をさらに追求するのも、実際の修道会へ近づくのも自己防衛として理解できる。

物語版の「乙女の生活」では、物語のテーマに合わせるため、独身への世間の嘲笑がさらに激しく書き立てられ、一方で修道女のイメージにつながる従順と清貧の記述が削除される。こうしたメタファーとしての修道女からの脱却は、亡命中に書かれた別の祈願詩「詩神との約定」にも見られる。こちらの詩ではむしろギリシア・ラテン文芸における詩神の呼びかけに回帰しており、前半の祈りと後半の呪いが壮絶な対照を見せている。後者は詩神に与して文筆に励めば人並みの幸福は得られないと迫る無分別な倫理による脅しにほかならない。

邦語による先行研究では、それぞれ物語『愛のたくらみ』の文脈に即して、前半を失恋詩、後半を正夢と捉えた上で、玉田佳子は失恋の詩のなかにある「強さと積極性」(132)を評価して独身として創作や勉学に励む「作家としてのアイデンティティを主張している」(133)と採り、河崎良二は特に前半の詩の前後に思考動詞が多いことから意識の流れが反映されたものと捉え(194)、一ノ谷清美は結婚という生き方を排した「芸術的創造、思索を可能にする孤独」(26)を強調する。

これら解釈に共通するのは、結婚への圧力という呪いがあってもなお、孤高な意志を持って思考し創作する強さであろう。「乙女の生活」ではどちらかといえば、処女性を受け身の盾として用いながら文芸サークル活動への祈願を行っていたが、肝心な詩への靈感は下りてきていない。しかし「詩神との約定」では亡命先でひとりになって独身への呪詛を浴びても、それでもたゆまぬ意志で筆を執ろうというあり方に、詩神の〈声〉が返ってきている。そしてバーカーがそれに応えるかのように、引き続き作品を執筆したからこそ、フェミニズム批評のなかで彼女は再発見され、今私もその詩を読んでいる。とすれば、「詩神との約定」はごく素朴に、そのあと描かれる半自伝的な主人公の活躍する(散文の)叙事詩へと向かう始まりの祈願詩とも捉えることができるのだろう。

主要参考文献

- Barash, C. (1996). *English Women's Poetry, 1649-1714: Politics, Community, and Linguistic Authority*. Oxford: Clarendon Press.
- Beal, P. (1998). *In Praise of Scribes: Manuscripts and their Makers in Seventeenth-Century England*. Oxford: Clarendon Press.
- Bower, T. (1997). "Jacobite Difference and the Poetry of Jane Barker". *ELH*, 64(4): 857-869.
- Brant, C. (2006). *Eighteenth-Century Letters and British Culture*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- EEBO Text Creation Partnership [ed.] (2003). *Poetical Recreations Consisting of Original Poems, Songs, Odes, &c. with Several New Translations: in Two Parts / Part I, Occasionally Written by Mrs. Jane Barker, Part II, by Several Gentlemen of the Universities, and Others*. Ann Arbor, MI: Early English Books. <<http://name.umdl.umich.edu/A30923.0001.001>>
- Eicke, L. A. (2002). "Jane Barker's Jacobite Writings". G. L. Justice and N. Tinker [eds.] *Women's Writing and the Circulation of Ideas: Manuscript Publication in England, 1550-1800*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.121-136.

- (2003). *The Extremity of the Times: Women and Jacobitism in British Literary Culture*. Doctoral Thesis at the University of Maryland.
- Erskine-Hill, H. (2004). "Poetry at the Exiled Court". E. Corp [ed.] *A Court in Exile: The Stuarts in France, 1689-1718*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.215-234.
- Ezell, M. J. M. (1993). *Writing Women's Literary History*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- (1999). *Social Authorship and the Advent of Print*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- (2003). "By a Lady: The Mask of the Feminine in Restoration, Early Eighteenth-Century Print Culture". R. J. Griffin [ed.] *The Faces of Anonymity: Anonymous and Pseudonymous Publication from the Sixteenth to the Twentieth Century*. New York: Palgrave Macmillan, pp.63-79.
- (2017). *The Later Seventeenth Century: The Oxford English Literary History, Volume 5: 1645-1714*. Oxford: Oxford University Press.
- Evans, R. C. [ed.] (2009). *Jane Barker - The Early Modern Englishwoman: A Facsimile Library of Essential Works. Series II Printed Writings, 1641-1700, Part 4; v. 1*. Farnham: Ashgate.
- Fauteux, L. S. (2011). *Living her Narrative: Writing Heroines in the Eighteenth-Century Novel*. Doctoral Thesis at University of Southern California.
- Greer, G., J. Medoff, et al. [eds.] (1988). *Kissing the Rod: An Anthology of Seventeenth-Century Women's Verse*. London: Virago Press.
- Hammond, P. [ed.] (2002). *Restoration Literature: An Anthology*. Oxford: Oxford University Press.
- Hayes, J. C. (2009). *Translation, Subjectivity, and Culture in France and England, 1600-1800*. Stanford: Stanford University Press.
- King, K. R. (1994). "Jane Barker, *Poetical Recreations*, and the Sociable Text". *ELH*, 61 (3): 551-570.
- and J. Medoff (1997). "Jane Barker and Her Life (1652-1732): The Documentary Record". *Eighteenth Century Life*, 21 (3): 16-38.
- (1998) *The Poems of Jane Barker: The Magdalen Manuscript*. Oxford: Magdalen College.
- (2000). *Jane Barker, Exile: A Literary Career 1675-1725*. Oxford: Clarendon Press.
- (2004). "Barker, Jane". *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 3. Oxford: Oxford University Press, pp.880-881.
- Lacroix, C. (2011). "Wicked Traders, Deserving Peddlers, and Virtuous Smugglers: The Counter-Economy of Jane Barker's Jacobite Novel". *Eighteenth-Century Fiction*, 23(2): 269-294.
- Lipking, L. (1997). "The Jacobite Plot". *ELH*, 64(4): 843-855.
- Love, H. (1993). *Scribal Publication in Seventeenth-Century England*. Oxford: Clarendon Press.
- McArthur, T. M. (2007). "Jane Barker and the Politics of Catholic Celibacy". *SEL*, 47 (3): 595-618.
- Mello, P. (2015). "Barker, Jane". G. Day & J. Lynch [eds.] *The Encyclopedia of British Literature, 1660-1789, vol. 1*. Chichester: Wiley Blackwell.
- Myers, J. (2018). "Jane Barker's Conversion and the Forms of Religious Experience". *Eighteenth-Century Fiction*, 30(3): 369-393.
- Pittock, M. G. H. (1994). *Poetry and Jacobite Politics in Eighteenth-Century Britain and Ireland*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sarraj, F. (2001). 'As the World now rolls, we are under a Kind of Constraint to follow its Byass': Authorship and the Changing Times in the Fiction of Jane Barker, 1679-1726. Doctoral Thesis at the University of Manchester.
- Saunders, J. W. (1951). "The Stigma of Print: A Note on the Social Bases of Tudor Poetry". *Essays in Criticism*, 1 (2): 139-164.
- (1964). *The Profession of English Letters*. London: Routledge.

- Shugrue, M. F. and J. Grieder [eds.] (1973). *The Lover's Week and The Female Deserters by Mary Herne; Love Intrigues by Jane Barker: Foundations of Novel*. New York: Garland Publishing.
- Spencer, J. (1986). *The Rise of the Woman Novelist: From Aphra Behn to Jane Austen*. Oxford: Basil Blackwell.
- Todd, J. [ed.] (1989). *British Women Writers: A Critical Reference Guide*. New York: Continuum.
- Trolander, P. and Z. Tenger (2007). *Sociable Criticism in England, 1625-1725*. Newark: University of Delaware Press.
- Wilson, C. S. [ed.] (1997). *The Galesia Trilogy and Selected Manuscript Poems of Jane Barker: Women Writers in English 1350-1850*. Oxford: Oxford University Press.
- (2009). "The Stories We Hear, The Stories We Tell What Can the Life of Jane Barker (1652-1732) Tell us about Women's Leadership in Higher Education in the Twenty-first Century?". *Forum on Public Policy Online*, 2. <<https://eric.ed.gov/?id=EJ870102>>
- 安達まみ(2017)『イギリス演劇における修道女像 — 宗教改革からシェイクスピアまで』岩波書店
- 一ノ谷清美(2017)「亡命宮廷の庭にて語る — ジェイン・バーカー『愛の陰謀』—」『名城大学人文紀要』53(2) : 15-31.
- 大久保友博(2013)「近代英国翻訳論 — 解題と訳文 キャサリン・フィリップス 書簡集(抄)」『翻訳研究への招待』9 : 129-140.
- 河崎良二(2009)『語りから見たイギリス小説の始まり — 霊的自伝、道徳書、ロマンスそして小説へ—』英宝社
- 玉田佳子(2009)『偽装する女性作家 — 十八世紀イギリス女性作家の戦略—』英宝社
- 友清理士(2004)『イギリス革命史 下 — 大同盟戦争と名誉革命』研究社
- ルクレール、J(2004)『修道院文化入門』(神崎忠昭・矢内義顕 [訳])知泉書館